Osaka University Knowledge Archive

Title	現代日本語における属性表現の研究
Author(s)	栗原, 由加
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59126
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【19】

氏　　名	栗（くり）　原（はら）　由（ゆ）　加（か）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２５０５８　号
学 位 授 与 年 月 日	平成 24 年 3 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	**現代日本語における属性表現の研究**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　仁田　義雄 （副査） 教　授　小矢野哲夫　　教　授　堀川　智也　　教　授　三原　健一 准教授　筒井　佐代

論　文　内　容　の　要　旨

１．本研究が目指したこと

叙述の類型という観点からは、文は大きく動きを表すタイプと動きを表さないタイプに二分される。または、時間性という観点から、動きを表すタイプ、一次的な状態を表すタイプ、恒常的な性質を表すタイプ、の三つに分類するという方法もある。これらのうち、「動きを表さないタイプ」または「恒常的な性質を表すタイプ」とされる一角はこれまで焦点を当てられることの少なかった分野であり、本研究における研究対象である。

本研究で取り上げたのは、従来、属性表現と称されてきたもので、時間性を持たない以下のような文である。

- 雪は白い。（形容詞述語文）
- 太郎はいい人だ。（名詞述語文）
- 太郎はよく泣く。（動詞述語文）
- この本は大学生によく読まれている。（動詞述語文：属性叙述受動文）

属性表現という概念は、様々な文法現象にまたがる概念であり、叙述の類型という観点以外にも、主題、助詞、アスペクトの研究等において、言及されることのある概念である。また、ヴォイスにおいても一部の例外的な受動文の研究においては、属性表現という概念を用いて説明を与えるという分析方法がとられてきた。

近年、その有用性から、属性表現という概念をひとつの分析手段とする文法研究も行われるようになっているが、その規定方法と、属性表現の外延については、研究者の間で統一的な見解があるというわけではなく、次のような問題がある。

- 属性表現か否かという判断に統一的基準がない
  ＝「属性」がどのような文法現象に支えられている表現なのかが明確になっていないため、「属性」か否かの判断基準があいまいである。
- 「属性」が文脈にかかわる場合の扱いが明確ではなく、より典型的なものから派生的なものへという広がりが明らかではない
  ＝様々な表現が属性表現という同じ枠組みで分析されており、属性表現の外延が不明確である。

そこで本研究では、現代日本語において「属性」が表現される文（属性表現）をテーマとし、文法研究への貢献という観点で以下のことを目指した。

①「属性」にある規定を与えること
②その規定にもとづき、どのような文がどのような視点で属性表現と見なされるのかを明らかにすること
③属性表現とみなされる文の文法的な特徴を明らかにすること
④本研究における属性表現の分析が、他の文法現象の分析に役立つことを示すこと

以上の目的により、本研究においては、まず「属性」にある規定を与え、次に「形容詞述語文」「名詞述語文」「動詞述語文」の順で議論を進め、それぞれのタイプにおいて次の二点を明らかにした。

①各述語のタイプにおいて、どのような属性表現があるのか
②各述語のタイプにおいて、どのような属性表現の特徴が明らかになるのか

２．本研究の主張と成果

２．１．「属性」とは

本研究では、以下のとおり「属性」に規定を与えた。

- 主題として表現されるモノ／ヒトのある側面のありようを表したものである
- 側面のありようとは、主題として表現されるモノ／ヒトが他の同列に並ぶモノ／ヒトと比べられる中で現れてくるものである
- また側面のありようとは、認識主体が一般化されることにより対象の説明として立ち現れてくるものである
- 認識主体の一般化という理由により、側面のありようは時間性を持たない恒常的なものとして表現される
- 「属性」には恒常的な属性と過去の属性がある。

２．２．本論の概要

＜形容詞述語文における属性表現＞（第１章）

形容詞には大きく属性形容詞と感情・感覚形容詞の分類がある。またその中間的なものとして、評価・判断の形容詞を認めることができる。これらの形容詞は、それぞれ述語として用いられることで、以下のような属性表現となる。

（１）雪は白い。（属性形容詞）
（２）太郎はすばらしい。（評価・判断の形容詞）
（３）へびはこわい。（感情・感覚形容詞）

形容詞が属性形容詞か、評価・判断の形容詞か、感情・感覚の形容詞か、という区別は、その属性表現の特徴を考えるにあたって重要な区別である。それぞれの形容詞述語が持つ特徴は、名詞述語文、動詞述語文の属性表現の特徴について考える際にも有効なものとなる。以下、それぞれの形容詞による属性表現の特徴を記す。

- 属性形容詞の述定用法による属性表現
  「ＸはＡ」という構造の「Ｘ」の側面のありようについて、その特徴を直接的に述べる表現。
- 評価・判断形容詞の述定用法による属性表現
  「ＸはＡ」という構造の「Ｘ」の側面のありようについて述べられているが、それがどのような側面についての表現なのかは形容詞の語彙的な意味だけではわからず、文脈から判断する必要がある表現。
- 感情・感覚形容詞の述定用法による属性表現
  条件を示すことで属性が表現されるタイプ。ある条件がまっとうされれば、常にある感情や感覚を持つということが転じて属性表現となる。このような感情・感覚形容詞による属性表現は、「太郎は注意を受けるとすぐしょげる」のような動詞文とも近い表現である。

本研究では、上の三つのタイプの属性表現のうち、属性形容詞による属性表現を属性表現の典型に位置づける。ただし、属性形容詞のうち、「同じだ」「違う」「そっくりだ」「無関係だ」などの関係を表す形容詞については、以下のような述定用法でも属性表現とはみなさない。

（４）漫画家と会社員は実はほとんど同じだ。

これは、関係を表す表現が、かならず「ＡはＢと同じだ」のようにＡとＢとの関係で表現されることに鑑み、Ａの側面のありようについて述べられている表現ではないと考えるからである。このような関係の表現は、以下（５）のように、「Ｂ」がなければ意味のわからない表現になることからも、属性表現とは異なるものに位置づける。

（５）?? 漫画家は同じだ。

本研究では、このような考えにより、全編を通して関係の表現は属性の表現とはみなさないという方針をとる。
なお、形容詞述語文は、かならずしもいつも属性表現になるわけではない。例えば以下の（６）のように、発話時点での発話者個人の印象を表現することもできる。

（６）（ゆずひこが鏡で自分の姿を見ている状況で）
ゆず：カラダが　白い…
　　ー今年はプールの日にかぎって雨でまだぜんぜん焼けてないから…
ゆず：みっともな…まじ早く焼かねーと…
（「あたしンち⑫」けらえいこ）

属性表現とは、以上の「白い…」のようなものや、「私には、へびはかわいいんだけど」のような表現ではなく、「いつでも、だれにとってもそうだ」ということが転じて、対象の属性として表現されているものである。このことをもって、形容詞述語文の属性表現からは、「認識主体の一般化」という属性表現の特徴を示した。

＜名詞述語文における属性表現＞（第２章）
名詞述語文においては、述語名詞として使われる名詞のタイプを分析することで、どのような名詞述語が属性表現になるのかを明らかにすることができる。名詞述語文が属性表現となるのは、以下のような場合である。

（７）太郎はやさしい性格だ。（「性格」は「太郎」の側面）
（８）太郎はやさしい人だ。（「人」は「太郎」の上位概念だが実質的な意味はない）
（９）太郎はしっかり者だ。（「しっかり者」は「しっかり」と「者」の複合名詞）

（７）は「太郎の性格はやさしい」ということである。（８）（９）の「人」「者」には実質的な意味がなく、それぞれ「太郎という人はやさしい」「太郎という者はしっかりしている」ということを表している。これらはすべて、「太郎」の性質についての説明であるため、このことから属性表現の「主題として表現されるモノ／ヒトのある側面のありようについて説明する」という特徴を示すことができる。なお、この「側面」には「色、形、匂い、大きさ、手触り、性質、態度、材質、産地、構造、用途」などが含まれる。
なお、「くじらは哺乳動物だ」などの包含関係を表現する文は、形容詞述語文で取り上げた異同関係と同様、「くじら」の側面のありようについて説明する表現ではないため、本研究においては属性表現とは考えない。
また、「太郎は学生だ」という文も、この包含関係が表現されている文である。そうであるにもかかわらず、このような文が属性表現であるように感じられるのは、以下のような図式で、「学生」について「勤勉だ、真面目だ」などの属性がまず読み込まれ、「太郎」がその属性に該当するという解釈がなされるからである。

- 太郎は学生だ
  →「学生」の属性（純粋だ、貧乏だ、勤勉だ･･･）
  →「太郎」の属性：「学生」の属性
  （「太郎は学生だ」という文で、以上の「学生」の属性が太郎の属性として述べられる）

名詞述語文から明らかになる属性表現のもう一つの特徴として、「過去に限定された事態も属性表現となり得る」という点が挙げられる。上述の（７）から（９）は以下の（10）から（12）のように表現されれば、過去の属性表現となる。

（10）太郎はやさしい性格だった。
（11）太郎はやさしい人だった。
（12）太郎はしっかり者だった。

過去の属性表現は、時間を表すことばを伴うことによって、実質的には以下の三つのタイプの過去の属性を表現する。

（13）太郎は昔からやさしい性格だった。（現時点までの属性）
（14）太郎は昔はやさしい性格だった。（過去のある時期の属性）
（15）（死んだ）太郎はやさしい性格だった。（過去のある時点までの属性）

＜動詞述語文における属性表現＞（第３～第６章）
動詞述語文には、大きく「性質の属性表現」「習性の属性表現」「経歴の属性表現」の三つのタイプがある。「性質の属性表現」とは、名詞述語文、形容詞述語文の属性表現と連続する位置にあるもので、（16）や（17）のように動詞がル形やテイル形で表現され、時間性を持たない表現になる場合である。

（16）太郎は英語ができる。
（17）太郎はぼんやりしている。

「習性の属性表現」とは、（18）（19）のように、ある出来事が「しょっちゅう起こる」あるいは「めったに起こらない」こととして表現されることが、主題として表現されるモノ／ヒトの性質が引き起こしたものだという解釈で属性表現となる場合である。

（18）太郎はよく泣く。
（19）このパソコンは幼稚園児が使う。

また、このようなタイプの属性表現には、ガ格項以外に由来する名詞句が主題となる場合があり、その名詞句には以下のような特徴がある。

- 指示詞を伴う
  （20）このパソコンはみんなが使う。
- 総称名詞を用いて、他の総称名詞と比較する
  （21）パソコンはみんなが使う。
- 修飾部分を伴って名詞類を限定し、他の限定的な名詞類と比較する
  （22）ノート型パソコンはみんなが使う。
- 個別具体的な名詞を用いて、他の個別具体的な名詞と比較する
  （23）K空港前の広場はスケートボードができる。

このような特徴から、属性表現において述べられるのは、「主題として表現されるモノ／ヒトが他の同列に並ぶモノ／ヒトと比べられる中で現れてくる側面のありようである」という特徴が明らかになる。

「経歴の属性表現」とは、（24）（25）のように、過去に起こった出来事が「太郎」の現在のありかたに痕跡を残しているように表現することで、それが属性表現になる場合である。

（24）太郎は過去に大病をしている。
（25）太郎はノーベル賞を二つとっている。

なお、「性質の属性表現」「習性の属性表現」「経歴の属性表現」は、（26）から（29）のように、いずれも対応する過去の属性の表現を持つ。これは、先に述べた「過去に限定された事態も属性表現となり得る」という属性表現の特徴をまっとうするものであり、（28）（29）のような経歴が述べられている文も属性表現であると考えてよい。

（26）太郎は昔英語ができた。
（27）太郎は昔ぼんやりしていた。
（28）太郎は昔よく泣いた。
（29）太郎は過去に大病をした。

以上のように「形容詞述語文」「名詞述語文」「動詞述語文」の分析を行った上で、最後に、本稿で示した属性表現の特徴から分析できるひとつのケースとして、（30）のような属性叙述受動文を取り上げた。

（30）この本は大学生によく読まれている。

この文は、非情物が主題として表現される受動文であるため、本来であれば、対応する能動文におけるガ格項（大学生）は「ニヨッテ」で表示されるはずであるが、実際は「大学生に」と、「ニ」で表示されている。このような受動文は、日本語の受動文の中では例外的なものとされており、どのような原理でこの受動文が成立するのか従来問題とされてきた。本研究では、このような受動文が属性表現の要件を満たす文であり、能動文との対応というよりは、属性表現というタイプとして成立していることを示した。

3．まとめ

本稿が提示する属性表現とは、文の表現のひとつのありかたである。従来の文法研究は文法カテゴリーという枠組みをベースとして研究が進められるという傾向があったが、本研究で取り上げた属性表現とは、文法カテゴリーをまたがり、またそれとは別の次元で文を成立させる要因として働くものである。したがって、たとえ従来の文法研究の枠組みから外れる文であっても、本研究で明らかにした属性表現の特徴を満足させることによって、許容度の高い文として成立するものがある。

本研究では、従来あまり注目されることのなかった属性表現に注目し、このタイプの表現に規定を与え、それがどのような表現であるのかを明らかにした。それによって、「属性」を表現する文の広がりと、ことばの分析において表現のタイプに注目することの有用性を示したのである。

論文審査の結果の要旨

『現代日本語における属性表現の研究』と題された本論文は，文や節の担い表す叙述内容（事柄的内容）の意味的類型の１タイプである〈属性〉を表すものを〈属性表現〉と呼び，属性表現になる文や節について，様々な観点・側面から，その文法的・意味的特徴を明らかにしようとしたものである。

文の表す叙述内容の意味的類型としては，従来からも，動的事態か否か，時間的限定性を有しているか否か，という点から，〈動き（運動）〉や〈状態〉や〈属性〉などが取り出されている。また，広義属性の下位種として，さらに〈関係〉や〈質〉を取り出す立場も存する。ただ，従来の研究は，多様な文法カテゴリを出現させ，いくつもの成分を共起させる，動きを表す文については，様々な研究成果を残してきたものの，属性を表す文については，未だ十分な成果が存在しているとは言えない。まだまだ明らかにされなければならないことが多く残されているのが，属性を表す文・属性を表す表現である。

本論文の長所はいくつもあろうが，次の点を指摘すべきであろう。本論文の考察対象が十分研究が行われず解明を待っていた領域である，ということが，まず挙げられる。本論文は，従来，研究のはなはだ手薄だった問題領域への本格的な鍬入れである。属性および属性表現そのものに焦点を当て，様々な観点から分析・記述を行い，その解明を通して，文法研究への貢献を行おうとしたものである。

その結果，本論文は，従来から意見の一致を見ず，研究者により内包・外延的にも異なりのあった属性および属性表現に対して，属性の概念規定を試み，属性および属性表現の有する特徴を取り出し，属性表現の明確化を図っている。また，属性形容詞述語によって表される典型的な属性表現と動詞述語によって表される周辺的な属性表現，さらにその段階性などにも留意し，属性を表しうる表現をきめ細かく分析・記述している。本論文は上記の事柄に対して，かなりの程度に成功を収めた考察を行っている。

研究の遅れにはそれなりの理由がある。動きを表す文に比して，属性を表す文は，属性の表現であることによって呈する多様な形式的現れ・異なりを明確に持たない。

属性の表現であることによって呈する多様な形式的現れ・異なりを明確に持たない。形式的な異なりを伴って現れない現象は，文法分析・文法記述の対象になりにくい。文法的な分析・記述の難しい現象が属性表現である。従来の文法研究は，アスペクトやモダリティなど，限られた数の形式的な異なりが対立をなすことによって形成される文法カテゴリをきめ細かく分析・記述することによって，かなりの成果を残してきた。それに対して，属性表現は，叙述内容の意味的類型の１つである。様々な多様な文法現象が属性表現の形成に関わるものの，ある限られた形式が対立をなし，１つの体系的な関係を作っているわけではない。そのような現象に対しては，柔軟なそして総合的な目配りを持った考察が必要になる。属性表現は，述語に限っても，形容詞述語文のみではなく，名詞述語文，動詞述語文からも形成される。本論文は，述語の違いによる属性表現の形成を丹念に追いかけている。また，属性表現は，主題や助詞の問題，アスペクト，ヴォイスなどにも深く関わっている。本論文では，それらの文法現象のそれぞれについて，属性表現形成の観点から注意深く考察を施している。本論文の他の優れた点として，問題解明のため，文法現象を柔軟に横断的に総合的に考察していることが挙げられよう。

本論文は，属性表現への知見を深めるために着実に貢献し，今後の属性表現への研究進展の１つの踏み台となっている。

本論文には，考察の甘いところ，突っ込みの足らないところなどが，ときおり見られる。しかしながら，上記のような問題点が存するにしても，本研究の目的は十分達せられており，今後に残された問題が存することは，発展途上にある研究の宿命であり，本論文の価値を損なうほどのものではない。

これらのことを総合的に判断し，本審査委員会は，本論文が博士（言語文化学）の学位を与えるにふさわしい論文であると判断した。